

土地の男達との不思議なピクニックは、鳥葬が終わるまで続いた。

鳥葬師が遺体の最後の骨まで細かく砕いて与えてしまうと、それまで激しく餌を奪い合っていた鳥たちも満足したのか、一羽、また一羽と上空に舞い上がっては空の彼方に消えていき、いつの間にかだいたいその数を減らしている。その際にやってきたカラスがちゃっかりハゲワシの群れに混じって、残り物のご相伴に預かっていた。

丘の上で鳥葬を見物していた旅行者達も葬儀の終わりを察して切り上げる事にしたのか、丘から下りてくると私達の脇を通り過ぎ、近くに止めてあった車に向かって歩いて行った。最後に丘から下りて来たキリスト君は私と眼が合うと足を止めて言った。

「俺たちはこれから街に帰ってランチを食べに行くんだが、君も一緒に行くかい？」

髪やヒゲがだいたい伸びているところをみると長い旅をしているのかもしれない。感じの悪い人ではなかったし、ゆっくりとそんな旅の話を知りたいような気もしたが、私はまだ土地の男達とこの場において完全に鳥葬の儀式が終わるのを見届けたかった。

「ううん、私はもう少しここにいる」

「そうか、じゃあな」

キリスト君は片手を上げて挨拶すると他の旅行者達と車に乗り込み、鳥葬場から去っていった。

遠ざかる車を見送った後、私はフと自分の置かれている状況に気が付くと一瞬緊張に身体を硬くした。旅行者達が立ち去ってしまえば、私以外にこの場に残っているのは、鳥葬師と見ようによっては山賊の様な風体をした土地の男達だけじゃないか・・・！もしここで彼等が強盗にでも変身したら誰にも助けて貰えない。だが、敷物の上でおもいおもいに寛いでいる男達は、私の存在など殆ど問題にもしていない様子で和やかに談笑を続けていた。

しばらくすると丘の上で作業していた鳥葬師も全ての仕事を終えたのか、荷物を纏めて丘の斜面を下って来た。手には大きな袋のようなものを持っている。彼が何を行うのか見たかった私はピクニックの輪の中から立ち上が

り、鳥葬師のそばに歩み寄った。血まみれのエプロンで胸から下を覆っていた鳥葬師は、どこか他の理塘住民とは少し異なるように感じられる容貌の、やけに肌の色が黒い男だった。いくら鳥葬が一般的なものとして行われているチベットの住人でも、希望してこのような職業に就く者はいない様に思えたし、男が何となく他の住民と違っているような印象を受けた事からも、鳥葬師はきっとその職業に就く事を代々定められた一族の人達が行っているのではないかと思われた。

もし私の想像通りなら、このような職業に就いている男達はどのように街で暮らしているのだろう。妻や子供はいるのだろうか？他の理塘住民とは普通に付き合いがあるのだろうか？小さな疑問が次々に心の中に浮かんで消えていく。

男は傍に寄ってきた私にかまう事も無く、厭うような様子も見せなかった。仕事から解放された安堵からか、どこか楽し気に見える笑顔を浮かべ、丘の麓まで運び降ろした大きな袋を、燃え残りの薪が薄く煙を上げていたゴミ焼き場のような場所に投げ入れて、鳥葬師の仕事は完全に終了したようだ。袋の中にはいったい何が入っていたのだろう。きっと遺体が身につけていた衣服や頭髪などでは・・・？と想像したが、何となくあれこれ質問する事が憚られ、はっきりした事は確かめ損なってしまった。

簡単にブロックで囲われた焼却場で、火にくべられた袋がチロチロと炎を上げ始めたのを見ていると、友人に面影の似た男が声をあげ手招きして私を呼んだ。

「おーい、鳥葬は終わりだ。街に帰るぞ」

見れば鳥葬師の仕事が終えたのを期にピクニックも終了したらしい男達が、帰り支度を始めている。あれほどたくさんいたハゲワシ達もいつの間にかほんの数羽を残して姿を消していた。

本当は袋が燃えて中に包まれていたものが姿を現すところを確認したかったが、郷に入らば郷に従えだ。私は後ろ髪を引かれつつその場を離れて男達のいる場所に戻った。

「だって火が燃えているままだよ。このまま帰ったら危ないんじゃない・・・」

だがその場にいた男達は「大丈夫だから放って置けばいい」と全く意に介さない様子だ。焼却場はブロックで囲われているし、こんな草原の真ん中では燃え移るものもないという事なのだろう。

ピクニックの男達は荷物をまとめると止めてあった車に乗り込んだが、一人だけ自分のバイクで来ていた友人似の男は、私を呼ぶとバイクの後ろに座るように言った。えー！！この草原の中でカムパ(この地方のチベット族の男)のバイクに二人乗りするの！？私は内心歓声をあげていた。この土地に初めて訪れた時から憧れていた、草原の中でバイクを駆る男達・・・その風景の一部に自分も加われるなんて素敵じゃないかー！！

もし、そのまま何処かに連れて行かれちゃったらどうする？ そんな囁きも心の中をかすめなかった訳ではないが、初めて会った時から直感でこの男は信頼できるとの気持ちを抱いていた私は、躊躇無く彼のバイクの後ろに跨った。だが走り出してみれば、全くそんな心配には及ばなかった。男のバイクはかなりのポンコツで、二人を乗せた重い車体を喘ぐように動かしてゆっくり走り始めると、最高に加速してもたいしたスピードは出していない。道が上り坂に差し掛かったところでは、とうとう耐え切れないうようにプスン、プスンとエンジンを止めてしまった。

男は照れ笑いを浮かべると、私に一旦バイクから降りるように言い、軽くなった車体をゆっくり坂の上まで走らせた。バイクが古い事もあるだろうが、もしかしたら標高が高いせいもあるのかもしれない。私が以前バイクのツーリングで日本国内を走り回っていた時も、標高の高い山道の登り坂ではバイクが馬力を失い、いくらアクセルを回しても頼りなくスピードを緩めて走る事しかできなくなっていた事を思い出した。そんな日本の山道と比べれば、この理塘は街の標高が4000メートルを越えている。そんな土地で軽快にバイクを走らせるには当然何かの調整を行わなければならないだろうが、男のバイクはそちらの手入れがあまりされていないのかもしれない。

坂が下りに差し掛かるところで、私は再びバイクの後部座席(荷台?)に乗せて貰い、バイクはゆるゆると私達を理塘の街まで運んでくれた。住宅の並ぶ街の中まで来ると

「君は何処に滞在してるんだ？」

と男が私に尋ねたので、適当に宿の方向を指差して見

せると、街の目抜き通りまでバイクを走らせた男はそこで一旦バイクを止めた。

「俺はこの先まで行くから、あんたはここで大丈夫か？」

男の家は街の中心を通り過ぎた、まだ先にあるらしい。行きずりで知り合っただけの私を、彼はちゃんと紳士的に安全で不便のない場所まで送り届けてくれたのだ。

「どうもありがとう」

お礼をいうと男はいかつい顔を緩めて笑顔を見せた。大きな短刀を腰に携え荒くれ者のように見える風貌だが、笑顔になると目が優しい。シャツのボタンをキチンと襟元まで留めているのが男の真面目な性格を現しているようで好ましく思えた。

私は勝手に親しみを感じていた男とそのまま別れてしまうのが少し名残惜しい気がして「あなたの名前は何ていうの？」と訊ねてみた。「ガンマンマ」と名乗った男は、「此処に字で書いて」と私が差し出した手帳はやんわりと拒否して、自分は字が書けないんだと戸惑いと照れの混じったような顔をして言った。

彼が家の方向と指差したのは街の中心を通り過ぎ草原の方に向かう道だ。そんな大草原の真ん中で暮らしている彼等には文字など必要ないのかもしれない。自分でその名を手帳に書きとめた私が、お礼とお別れに握手を求めて差し出した手を握ると、男は再びポンコツのバイクに跨り去っていった。

鳥葬という(日本人の感覚では)凄惨な儀式を目にしてきた後だというのに、何となく暖かい気持ちが心の中に残っていた。ガンマンマなんて・・・西部劇のガンマンみたいな風貌をした男のイメージにピッタリじゃない。手帳に記せずとも、きっと忘れない名前だろう。ちょっと名残惜しい気持ちでガンマンマの後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、私はくるっと踵を返した。男のバイクに跨っていた時から、この後何処へ行くのか私の気持ちは決まっていたのだ。

私の足は再び鳥葬場に向かっていた。男達に呼ばれた時、私の気持ちはまだその場を離れたくなかった。だが土地の人間に逆らって一人その場に残るのはあまり賢明な行動とは思えなかったし、ガンマンマのバイクに二人乗りさせて貰った事は嬉しく、それは理塘の思い出として意味のある事だったので鳥葬場に戻る事が二度手間になるのは全く問題なかった。時間はたくさんあるし、私

は鳥葬の終わった場所がどうなっているのか、もう一度その場に行ってみてじっくりと確かめたかったのだ。

既に何度も通ってすっかり馴染んでしまった道をスタスタと歩いて誰もいない鳥葬場に戻った。気になっていた焼却場の燃えかすはまだ薄っすらと熱を持っていたが、袋は既に完全に灰になっていて跡形も無い。あれ程集まっていた鳥達は何処へ行ってしまったのか一羽残らず姿を消して、辺りは完全な静けさを取り戻していた。自分が何故これほど鳥葬に惹かれるのか自分でもよく判らなかったが、私はゆっくりと葬儀が行われていた丘に登ってみた。鳥葬師が骨を砕く作業台として使っていた石は、既に血に濡れていた形跡など感じさせないほど乾いている。不思議な気がした。本当にここで人の身体が解体されるなどという事が行われていたのだろうか。思い切って鳥達が群れ餌を奪い合っていた辺りを歩いてみると、地面が薄っすらと湿り気を帯びフワッと血の匂いが感じられる場所があった。2日前、初めて私が鳥葬場を訪れた時に見ていたのと同じ、瀬戸物の破片のような細かい骨片が地面に散らばっていた。

このわずかな、ホンの小さな骨の欠片だけが、故人の身体の名残なのだ。そこで人の身体がバラバラに刻まれた場所なのだと知っていても、私には特に恐ろしいとは感じられなかったし、骨片はただのカルシウムの欠片だった。自然から与えられた肉体が役目を終えて自然に還っていった。ただそれだけの事なのだ。

チベット族の人々が鳥葬という葬儀法を選んでいるのは、チベットの風土に合っている方法だという理由もあるが、鳥の体内に取り込まれた肉体が空を舞うことにより、故人を天に送り出すという意味も込められているのだそうだ。他国の人間からは一見残酷な風習のようにも思われがちな鳥葬という弔いは、確かに人が解体される様子やハゲワシが餌を奪い合う姿など、見ていて全く美しいものでは無かったが、それでも死後跡形も無くこの世から消えてしまう潔さは好ましく思われ、私には口マンチックなものに感じられた。

私も自分の命が尽きる時は、このように自然に還りたいという気持ちが強く湧きあがってくる。鳥の餌でも魚の餌でも構わない。せめてこの肉体が土壌を肥やし小さな花でも咲いてくれたら嬉しく思う。火葬場で焼かれ骨になった身体を小さな骨壺に入れられて、地面に作られたコンクリートの狭く暗い部屋の中に半永久に閉じ

込められ、自然に還る事さえ適わぬまま存在し続けなければならないなんて絶対にゴメンだ。人の弔いに対する習慣や受け止め方は国や宗教や個人によって様々だろうが、役目を終えた生命は、自然のリサイクルの輪の中で他の生命の為に役立つ存在である事が、この地球に生かされている生命体として本来のあるべき姿なのだと、私は気の済むまでその場で過ごしながらずと繰り返しそんな事を考えていた。

そんな時、誰もいない鳥葬場の丘の上で一人葬儀の余韻に浸っていた私は、先ほどまで鳥葬が行われていた場所に新しく置かれていたマニ石にその時初めて気付くとハッとしたりした。チベット語で祈りの言葉が掘り込まれ、美しく彩色されたそのマニ石には見覚えがあったのだ。

え！？・・・それは確かに私が北京軍団と共に稻城から理塘までやって来た日に、理塘寺院前の参道で売られていたマニ石だった。あの場に並べられていた石の中で一番美しく、北京軍団がそれを購入しようかと思案していた脇で、私が彫りこまれた祈りの文字を手帳にガスケッチしたマニ石に間違いはない。小さな街の事でマニ石屋などそう多くはないだろうし、考え過ぎだとは判っていたが、それでも強く印象に残っていたマニ石と思わぬ場所での再会に何か不思議な縁の様なものが感じられる気がした。

その石を見つけた事で次の目的地が決まってしまった。これから再び理塘ゴンパ(寺)にお参りに行き、あのマニ石屋に立ち寄って3日前に見たマニ石が消えているのを確認しに行くのだ。

勿論間違いなくあの石は無くなっている筈だが、既に目的を果たして満足してしまった理塘の街で他に特別やりたい事など無かったし、初日に訪れたお寺のたゞずまいと本殿の裏に隠されていた大仏には強く心を惹かれていた。もう一度あの場所を訪れて、この土地で出会った様々な出来事や良い旅が続けられている事をチベットの神様に感謝したい・・・。

不思議な縁で次に目指すべき場所を見つけられた事を嬉しく思いながら、鳥葬場を後にした私はお寺に向かって歩き始めた。